

東京中心の新聞や雑誌に対抗する形で、明治12（1879）年に京都で創刊された自由民権運動期におけるビジュアル資料を完全復刻。全126号分。

◆狂画点数270点以上。

◆詳細な狂画読み解き解説と人物プロフィール付き。



我楽多珍報

復刻版
全7巻

明治12年1月17日-明治16年4月13日

B5判上製 総2,300頁 分売不可
揃定価(本体180,000円+税)
ISBN978-4-7601-3472-4 C3321

福井純子
[編・解説]

柏書房

〒113-0021 東京都文京区本駒込1-13-14 TEL.03-3947-8251(営業) FAX.03-3947-8255
E-mail : eigyo@kashiwashobo.co.jp URL : http://www.kashiwashobo.co.jp/

『团团珍聞』『驥尾団子』に匹敵する、
幻の諷刺雑誌がよみがえる！

本書を推薦します

(五十音順・敬称略)

『我楽多珍報』が描く明治前期日本

中京大学文学部准教授・近代出版史 浅岡邦雄

若き日の宮武外骨が、『团团珍聞』から影響を受けて、自ら雑誌を刊行したことは知られている。その『团团珍聞』に対抗して京都で創刊された風刺滑稽雑誌『我楽多珍報』の復刻版が、このたび刊行される。痛烈な狂画・狂文による風刺は、ときに筆禍の厄にもあう。編集長大柴法剣はそのため下獄するが、彼こそ、のちに東京書籍商組合第四代組長となる朝香屋主人大柴四郎の若き日の姿であった。

『我楽多珍報』が描いた明治十年代の日本、それはいかなるものか、興味はひろがる。

無責任極に達した現今の政治・社会に喝を入れる愉しみ

早稲田大学文学学術院教授・日本近代史 安在邦夫

気骨ある人びとが、気骨ある行動を執った時があった。そして勇気とユーモアをもってこれを伝える人びとがいた。あるべき近代国家像をめぐる争った明治十年代である。『我楽多珍報』（通称『我楽珍』）は、その軌跡を伝える貴重な雑誌である。無責任極に達した現今のわが国の政治・社会を糾弾し、喝を入れる愉しみを学ぶ書として、『我楽珍』は恰好のテキストである。この度、原寸サイズで復刊されることになった。嬉しい限りである。本書に漲る民衆の力強い批判的創造的な心根を、多くの人々が自らのものとするを期待したい。

120年ぶりのゲーム

帝京大学教授・近世文学 延広真治

小学校、中学校、図書館、博覧会、市外電車、果ては裸体画展示の是非も、すべて京都が魁けとなった。その最先端の都からの文明開化期の日本を諷刺したのが『我楽多珍報』。発行停止、投獄を振り翳す官権を相手に、どう靡めかせば罰を免れるか。処分を受ける号もあれば、よくぞ見逃したと胸を撫でおろす時もある。お偉いはん相手の「ガラチン」の奮闘ぶりは任天堂のゲームのように面白い。幸い福井純子氏の懇切な謎解きで、誰でも納得できるようになった。さあ、120年ぶりのゲームに参加しよう。

読んで楽しい、見て楽しい

京都精華大学マンガ学部准教授
京都国際マンガミュージアム研究統括室長
思想史・まんが研究 吉村和真

「君が好きだ」「ヒューッ」と、漫画のセリフを声に出すのは恥ずかしい。それは漫画が黙読を前提に描かれているからだ。だが、かつて漫画にも音読の要素を含む時代があった。正確に言えば、「漫画」という呼称や形式が一般的になる前に存在した、ポンチ絵や狂画、戯画、諷刺画など、「絵と文字の融合表現」とでも総称できるものたちがそれだ。『我楽多珍報』には、そんな口承文芸の味わいを楽しめる表現が盛りだくさん。京都発という地域性ととともに、「漫画」の歴史や輪郭を考えるうえでも大変貴重な史料である。

お奨めします

近代政治史／社会史／民衆史／風俗史／美術史／図像史／文学史／
自由民権運動史／メディア史／公共図書館・大学図書館

明治政府がもっとも恐れた
漫画諷刺雑誌

『驥尾団子』復刻版

【全10巻】
明治11年10月9日～明治16年5月9日

新井勝絨 監修

B5判上製函入・総3,800頁
揃189,000円(本体180,000円・分売不可)

姉妹雑誌『团团珍聞』に劣らぬ滑稽諷刺と狂画を武器に、明治十年代を縦横無尽に駆け抜け、そして「自害」した、日本近代史上においてもっとも過激なカリキュール『驥尾団子』の全貌が、はじめて明らかに。



取扱店

柏書房

〒113-0021 東京都文京区本駒込 1-13-14
TEL.03-3947-8251(営業) FAX.03-3947-8255
E-mail:eigyo@kashiwashobo.co.jp URL:http://www.kashiwashobo.co.jp/

民権と国権が激しく衝突した明治10年代に誕生した『我楽多珍報』が、京都府知事らを徹底して諷刺するとともに、返す刀で政府要人、財界人、知識人らを次々と狂画の餌食にしていく！



讚岐の惡比羅羅参り(第53号、1880.11.5)

官の門前にやってきた金毘羅参りの「小二四」=小西甚之助(自由民権家)。天狗の面をつけた箱には国会請願ならぬ「滑稽請願」の文字。金毘羅参りは「何卒(どうか)旦那陸右衛門殿(=陸仁=明治天皇)に面会致しとう御座る、番頭の三左エ門(=三条実美)でも、岩公(=岩倉具視)でも、有公(=有栖川宮)でも苦しくない、逢して下さい」と取り次ぎを求め。門番は「真平御免」と小西を押し止どめる。米僱作。



がらくだ裁判所にひかれる(第55号、1880.11.19)

場所は裁判所の門前。鯛(着物に「あかし」の文字)=明石博高(京都府一等属)に引かれてやって来た頭は鶯鳥、体はラクダというがらくだ=「我楽多珍」。背中に第49号で見たゲルマ落しの人形をのせ、首輪には「しば」の文字=編集長大柴法剣。後ろで棒を持って指図する飛び頭の男=横村府知事。11月8日、『我楽多珍』は第49号の狂画のため、横村府知事に告訴される。米僱作。



国怪願妄者大ニ東京ニ会ス(第56号、1880.11.26)

11月10日、東京で国会期成同盟第2回大会開催。狂画は東京に続々と押し寄せる国会願望者の群れを描く。先頭に立つのは陣太鼓を打ち鳴らす鶏、ホラガイを吹く山伏、薬売りに金毘羅、その後ろには猿回し(頬かぶりの手ぬぐい)「四国」の文字、虚無僧、竜払い(折烏帽子と顔が「国会」)、願入坊主(幟に「国塊願入坊」の文字)、犬の六部(幟に「国会」、天蓋に「民谷犬子代」の文字)、貝、鳥が続く。それを待ち受ける探訪者たち。米僱作。



ぶいぶいさせたると(第116号、1882.8.18)

画面中央に虎の毛皮。その左手は朝鮮王宮に見立てたせんち、右手は戦場。中央には髭をはやした怖そうな日本の軍人(帽子に蜻蛉の徽章)が刀を構えて大きなおなら。その部下たちは双眼鏡を覗いたり、銃を担いだり弾んだ様子。大砲の車輪は菊の模様。朝鮮の軍人たちの被害は甚大。雪隠でお尻を出してしゃがむ王様(衣装に「大淫」の文字)=大院君は不安な顔。雪隠の扉のかけには張り子のようなかわいらしい虎と大院君の側近たちが控えている。この狂画は壬午軍乱がテーマ。おいしいものを食べ過ぎた軍人は、宴会続きの薩摩人への当てこすり。「大淫」の当て字や、戦地に向けたとはいえ王宮を雪隠に描くなど、朝鮮への皮肉もきついが、作者は埒外にいるという態度。米僱作。



制鯛八態(第14号、1879.5.23)

狂画の中央に紙細工の「制(せい)鯛(たい)」=政体。その周囲に生じる種々の相を描く。攘夷家は刀で切りつけ、僧侶は念仏を唱え、不平士族は刀を振りかざす。民権家は子猿と一緒に剣を向け、官吏(鯨)は鯛の破れたところを繕いながら忙しそう。新聞記者は筆を構え、西洋列強はこの様子を窺い、キリスト教の宣教師は十字架を担いでいる。米僱作。



『我楽多珍報』創刊号表紙



京名物情流魔(だるま)落し(第49号、1880.10.8)

だるまおとしの遊技場。だるまは2体。1つは病鉢巻を締め、丸に釘抜き紋=横村府知事。もう1つは「国」の文字=京都府大書記官国重正文。だるまに「第誤条」「追徴」の玉をぶつける男たち。これは地方税追徴布達事件の狂画。「第五條」は、議務律第5条。布達事件報道により8月中旬『西京新聞』『京都日新聞』編集長が罰金5両に処せられる。米僱作。



無道理の墨塗り(第70号、1881.7.15)

十字架のキリストに墨を塗る僧侶。視には「無道理」の文字。僧侶が踏み台にしているのは洋服に帽子姿の男=同志社。西本願寺の藤島了穩が排耶論の書『耶蘇教之無道理』を出版したのは6月。無料の施本によって爆発的に普及。この頃京都では杞憂会、交詢社による駁耶演説、同志社の反駁演説が盛ん。米僱作か?

『我楽多珍報』について

明治12(1879)年1月17日に創刊、同16(1883)年4月13日の第127号まで続いた京都発の滑稽雑誌である(なお、第118号は現存しない)。サイズは縦218mm×横142mmで、ほぼA5判に近い。平均16頁で、1号あたりに2~3点ほどの狂画が描かれている。

本誌創刊時の発行所は京都日日新聞社(第1号~第33号)で、以降、京都日報社(13年3月~、第34号~第48号)、浮西京絵社(13年10月~、第49号~第127号)と発行所名が変わる。

本誌歴代の編集長は、岩佐丈三郎(第1号~第3号)、古谷得三(第4号~第20号)、雑賀豊太郎(第21号、第22号)、内山亀太郎(第23号)、石井俊郎(第24号~第48号、第56号~第68号、第86号~第99号、第116号)、大柴法剣(第49号~第55号)、渡辺末綱(第69号~第72号)、中路有(第73号~第85号)、高田似壠(第100号~第115号、第117号)、村上龍之助(第119号~第127号)が務めた。また、同誌の狂画の多くは日本画家の久保田米僱が描いている。狂画では、条約改正問題、琉球処分、自由民権運動、京都府知事、京都府議会、本願寺らを槍玉に挙げている。また、誌面は鈍説・珍報・雑録・狂画・広告で構成されている。

久保田米僱 について

嘉永5(1852)年京都生まれ。日本画家。鈴木百年に師事。新聞挿絵などで新境地を開き、日清戦争時には『国民新聞』の記者として従軍した。明治39(1906)年歿。